



4 質の高い教育を  
みんなに



10 人や国の不平等  
をなくそう



11 住み続けられる  
まちづくりを

## 古声楽譜から探る過去の日本語の声

法文学部 教授 浅田 健太郎

過去の日本語の声がどのようなものだったか、それを知る手立てはほとんどありません。言葉は口にした瞬間に消失してしまうからです。日本語史研究では、さまざまな文献に現れる手がかりや現代の方言の比較などによって、過去の日本語の声を復元しようと試みています。声明や謡本などの、伝統音楽の楽譜もその手がかりの一つです。

例えば現在私たちは「知った」の「っ」のようなつまる音を書こうとするとき、「つ」を小さく書きます。この方式が広く使用されだしたのは明治時代以降ですが、実は鎌倉時代の天台宗の僧侶が、声明をより正確に楽譜に反映させようと工夫を重ねた結果、初めて編み出した方法なのです（左写真2行目の一番下に仏(フッ)とあるように）。ここから、当時の日本語話者が、どのようなときにつまる音を使っていたのかが分かります。古楽譜からこのような小さな証拠を集め、過去の日本語の声を復元しようと試みています。

声楽譜や伝統音楽を研究し理解することは、文化の次世代への継承に不可欠なプロセスです。また日本語がどのように変化して現代語の姿に至ったかを知ること、どの言語も本質として優劣がないこと、その多様さを尊重すべきことが、浮かび上がってきます。

